

Observing, Documenting and Interpreting the Learning Experiences of Young Children, Their Teachers and Their Parents in the Preschool of Reggio Emilia

レッジョ・エミリアの幼児学校における幼児・教師・親の学習経験の 観察・記録・解釈

東京大学大学院教育学研究科
教育研究創発機構
ガンディーニ先生公開講演会

2005年11月16日（水）18：00～20：30
東京大学本郷キャンパス 赤門総合研究棟 200番教室

講演者： Lella Gandini(マサチューセッツ大学)
指定討論者： 佐藤 学（東京大学）
通訳： 鈴木正敏（兵庫教育大学）
司会： 秋田喜代美（東京大学）

秋田 それでは、時間になりましたので、6時になりましたので、講演会のほうを始めさせていただきたいと思っております。皆さんお仕事などの終わられたあとの、この夜の時間に大勢の皆様にお集まりいただきまして、ありがとうございます。

今日は、横浜インターナショナルスクールの招聘によって、東京のほうへ来られました、Lella Gandini先生に、ぜひほかの所でもお話をいただきたいということで、共通の友人がいて、その方を介して今日こちらのほうにお越しいただくことができました。

Lella Gandini先生はご存じの方も多と思いますけれども、スミスカレッジと言う所で、学士、修士を終えられ、そしてマサチューセッツ大学で教育学の博士号を取られておられます。そして、現在、マサチューセッツ大学の教育学部のほうで、幼児教育についてのご講義などを持たれておられ、また、97年からでしょうか、ずっとイタリアとアメリカを結んで、レッジョ・エミリア・アプローチを中心にしながら、その教育の比較研究や、レッジョ・エミリア・アプローチを、広くアメリカに紹介される本等を書かれておられる先生です。

アミューズメントパークというビデオテープや、いくつかのビデオテープを作られましたり、日本で翻訳が出

ているのは「子どもたちの100の言葉」の本ですが、そうした教育哲学的な本から、あるいは、今日お持ちした「ビューティフルスタッフ」のような、本当に保育の具体的素材をどのように集めたらよいかというような実践的な話の本をはじめ、一番新しく今年出されたものは「イン・ザ・スピリット・オブ・ザ・スタジオ」という本で、アメリカで実際に、例えば、保育、幼児教育、それから小学校の低学年のクラスも入っていますが、アメリカの幼稚園と小学校で教室をどういうふうに変えていくと、どんなふう変わったかということについて、レッジョの哲学と共に書かれた本でございます。このように多様な次元や種類の本を作られておられます。

大変、実践的面を大事にされています。昨日も実は一緒させていただいた時に、レッジョ・エミリア・アプローチのコピーを世界じゅうに作るのではない。それぞれの地域に根ざしたオリジナリティを持ちながら、その哲学を受け継ぎ、各々の地域で、レッジョのあり方を問うていくのがいいのではないかというようなお話をいただきました。

そこで、今日は先生に具体的な姿を含め、特に記録についてお話をうかがいます。いろいろな幅広い側面からレッジョ・エミリアのお話いただける方ですが、今日はこちらからリクエストをして、「幼児・教師・親の学習経験の観察・記録・解釈」という、ドキュメンテーションという大きなレッジョ・エミリアの特徴の部分で、時間は限られておりますが、お話をいただくことに致しております。

そして、通訳は兵庫教育大の鈴木正敏先生のほうにお願いしております。実は、指定討論も、教育学研究科長の佐藤学さんをお願い致しております。また積極的に質

疑をしながら、進めていく形にしたいと思いますので、どうぞご理解くださいませ。

それでは、私の長い解説より、Gandini先生の生の声を聴いていただくのが一番だと思いますので、始めさせていただきます。よろしくお願いいたします。よろしくお願ひ致します。

Gandini 今日のイタリア語の最初の授業の始まりでございます。(笑い)

今日は皆さんお越しいただきどうもありがとうございます。それは、私の言葉を聴きに来るということだけではなくて、これから皆さんと対話ができるということを楽しみにしております。今日、それから、秋田先生、佐藤先生、それから十文字の野口隆子先生にはいろいろとご案内いただきましてありがとうございます。二つの園を訪問することができましたが、目黒区立ふどう幼稚園と二葉すこやか園。昨日見せていただきまして、大変素晴らしい1日でありましたし、また、イタリアとも交流ができたかなというふうに思っております。今回の訪日を歓迎してくださいました横浜インターナショナルスクールのキャンセミ先生、そちらにいらっしゃいますが、どうもありがとうございました。

今日はドキュメンテーションの非常に複雑な対応を話そうと思っております。しかし、そのことを話すのには、やはり物語を中心にして進めていきたいと思っております。皆さん、レッジョ・エミリアの哲学については、もう、ご存じのことかと思っておりますけれども、子どもたちの生活をより近くに見ることによって、それを、その哲学の鏡といったものを見ていただきたいと思っております。

秋田先生がおっしゃいましたアミューズメントパークのビデオがあるんですけども、それは創始者であるロリス・マラグッチ先生が先導されまして、その子どもたちの話をわれわれに見させてくれたということでもあります。「子どもたち100の言葉」のレッジョ・エミリアの展示会が、東京でも成功裏に行なわれたと聴いております。その中でも「都市と雨」という展示がございましたでしょうか。フォアマン先生と私自身が、子どもたちがいったいどのような議論を、その中に見いだしていくかということに非常に興味を持っておりました。雨が降るときにはどこから来るのか、雨が降ったあと、それはどこに行くのか。

皆さんにまずスライドをお見せしたいと思っております。よろしくお願ひします。まず、3枚だけちょっと紹介のためにお見せします。後ろの方ご覧になれますでしょうか。大丈夫でしょうか。大丈夫ですか。子どもたちは非常に

雲に興味持っていたんですが、2カ月の間、雨が全くレージョ・エミリアで降らなかった。それからまた雨が降ってきたんで、今度はもうどっさりとでございました。そして雨がやんだあとに美しい虹が見えた。その様子を子どもたちは、写真の上に虹の絵を描いたんです。

これは子どもたちが、子どもたちなりのビジョンで雨がどこから来るか。一番上の所は、悪魔がバケツを上から引っ繰り返しているところです。イタリアのおとぎ話では、そういった悪魔が、上から水をこぼしていることがありますので、それが一番上に来ております。一番下は、お母さんがパスタを煮ていると湯気が出るものですから、それが雲を作るんだという。3番目、真ん中の所ですけれども、天気予報士の、気象予報士の人がきつと雨を作っているんだみたいな。(笑い)

こういった子どもたちの表現を研究するのにフォアマン先生と私どもは、どのような理論を子どもたちが持っているかということだけではなくて、どのように子どもたちが、それを表現するかということに着目して研究をしています。で、レッジョ・エミリアではそういう点では、先生方が現場のアクションリサーチをしている。研究者であるわけです。で、その先生方が、ちゃんと研究を重ねていくということを実現したかったんです。

レッジョの町の広場ですけれども、何人の方がいらっしゃいましたでしょうか。けっこういらっしゃいますね。これは市の中の広場ですけれども、こういったマーケットがあるという、非常に一般的な、イタリアでは一般的なこのぐらいの都市のものであります。教会があつて、たくさんの方がここにいるわけです。

これからお話する一つの物語ですけども、皆さんお聴きになったことがあると思いますが、これはレッジョ・エミリアの教育の哲学です。比喩として、よく使われるものであります。この子は10カ月のルチアちゃんです。ですから、まだ、話しを、言葉を発しておりません。乳児園の中にあつた商品カタログに、ルチアちゃんが興味を持っているということに先生は気付きます。その点では、この先生は、非常に注意深く観察されていたということが言えます。先生は、ルチアちゃんが、気持ち良くカタログを見ることができるよう場所に位置しております。

先生は注意深くルチアちゃんを見ているんですけども、彼女はずっと集中してその本を見えています。レッジョ・エミリアでは関係性が非常に大事である、子どもの学びにとって大切であると言っております。彼女は言葉

を発しておりませんが、コミュニケーションする
すべを知っております。あるページの所に来ると、彼女
の目がぱたっと止まるわけです。で、見ていただきます
と、ルチアちゃんは先生の方に、ちょっとこう傾いてい
きます。それをまた先生が、受け止めているように見え
ます。

ルチアちゃんの言葉は全然ないんですけれども、目を
見ると、いかにも、はてながその中に入っているような、
そんな表情でじっと先生のほうを見つめます。それで、
見つめるだけではなくて、その写真を指差して「あー」
っていう、何か疑問を先生に投げ掛けているわけです。
このコミュニケーションの場面では、ルチアちゃん自身
が、その会話のイニシアチブを取っております。そのイ
ニシアチブに対して、先生がうまく応えているわけです。
で、その10カ月の子どもたちって、ものをさわること
も、非常に大事な道具です。コミュニケーションの道具で
あります。で、手を伸ばして先生の手をさわっています。

先生は、ここで、もうそのまま、コミュニケーション
を止めてしまうこともできました。しかしレヅジョでは、
子どもたちが興味を持ったら、それを受け止めて、そし
てそれを伸ばしていくことが必要であるというふうに考
えています。で、先生が耳のそばに時計をよせてこうい
うふうなことをしまして、ルチアちゃんを驚かせます。
時計がチクタク、チクタクと音を立てるということを、
彼女は知るわけです。で、ルチアちゃんと先生との距離
を見てください。非常に近づいています。で、先生と
子どもがいかに近い関係を持っているかということが、
これでご覧いただけたらと思います。

で、こういったことはどこの学校でも、どこの園でも
子どもたちが非常に心地良い環境を持つということがで
きるかもしれません。しかしそこに、レヅジョの先生方
は、普通であるものをもっと豊かにするということを言
っております。で、こういった子どもたちと先生の関係
が、あるいは保護者の皆さんとの関係が非常にしっかり
していれば、こういったことを、もっと豊かにすること
ができるっていうふうに信じています。で、先生だけで
なく保護者の皆さんも、子どもたちは非常に高い可能性
を、大きな可能性を持っているというふうに信じており
ます。

で、次のスライドを見ていただくんですけど、この子
は寝ているわけではありませんよね。何をしてるかは分
かりますね。(カタログに耳を押し当てて時計の音を聴
こうとしている)(笑い)先生方が研究者であるという
ふうに申しあげましたけれども、子どもたち自身も同じ
ように小さな研究者であるということ、これで見えて

ただけだと思います。で、子どもたちなりに自分で仮説
を打ち立てて、それを実験し、その答えを見つけていく
ということがあります。その仮説が正しいか、正しくな
いかが問題ではなくて、その仮説を立てること、問いを立
てること、それを、答えを探し求めていくこと、そのこ
とこそが大事であるというふうに思います。

こういった写真を皆さんにお見せできることは、かか
わっていた先生だけではなくて、それを撮っている先生
もこの中にいるということです。そういった、これがド
キュメンテーションでして、ドキュメンテーションによ
って、これが世界での皆さんとの対話の糧になっており
ますし、レヅジョの哲学を世界に広めている一部になっ
ています。

それでは、資料を皆さんはお持ちになつていますので、
読んでいただければいいんですけども、いくつか皆さん
と一緒に見ていこうと思っております。ドキュメンテー
ションによって子どもたちとはどういうものか、子ども
たちの学びというものはどういうものかというものを
見ていきます。ですから、それが質、能力の先生方の発
達、発展につながるわけです。

これは、皆さんがドキュメンテーションするには、ど
ういう環境ですのかということですね。ルチアの例を
とってみても分かりますけれども、いかに子どもたちの
声を深く、注意深く聴くかということが大切になってき
ます。で、そのルチアちゃんの写真がなければ、それを
これだけ深く話すことはできなかったと思います。とい
うことは、観察した軌跡を残しておくことは非常に大切
なことであります。

例えばカメラというのは、非常に限定されたシーンし
か撮ることができません。で、またほかのものは、いろ
んな可能性もありますし、また、限界もあります。例え
ば、手書きでメモをするときには、たくさん書けないか
もしれませんし、そのエネルギーが続かないかもしれま
せん。ビデオを撮るといろんなものが豊かに入っていま
すけれども、同時にそこからこぼれて落ちていくものと
いうのがたくさんございます。

音声録音をしますと、それでもたくさんものが聴けま
すけれども、あんまり取れないところもございます。で、
音声録音、非常に面白いところは、音が入っているところ
ではなくて、会話と会話の間のその沈黙というのが、
非常にいろんなものを示唆してくれるというふうに思
います。子どもはいったい何を作っていたかということ
をドキュメントすることは大事なんですけど、絵であつ
たりとか、製作物でとか、いろんなものがあつたりする。

それらは非常に多くのことを、私たちに物語ってくれます。

それを集めるだけではなくて、解釈することは非常に大事になってきます。その点において、フォアマン先生と集めました小鳥たちの遊園地という、そのことについてお話ししたいわけです。雨のことをやっておりました時に、創設者のマラグッチ先生にいったいどうやったら、子どもたちの理論を広げていくことができるかということをお話してみたいんですけど、マラグッチ先生いわく、これは子どもたちの理論を広げるとかどうとかいうことではなくて、子どもたちがその理論をもたらししてくれたんだから、それを注意深く見ることだというふうに言っておりました。

マラグッチ先生とほかの先生方はいろいろ相談をしまして、子どもたちにいかに、子どもたちのほうに近付いていくかということをお熱心に討論致しました。

これがラビレッタスクールですね。ラビレッタ学校では、この園は非常に外が広くて、公園のような広さを持った学校です。

マラグッチ先生とそれから園の先生方は、そういえば、これは10月ごろだったと思うんですけども、去年、そういえば子どもたちが小鳥が来てる。それをよく楽しんで、声をかけたりなんかしてたなということをお思い出しました。

で、鳥小屋を掛けて、それから水浴びのための小さな池を作ったり、そういったことを若い子どもたちは、喜んでしてたことを思い出しました。やっていたのは5歳の子どもたちでしたので、もう卒業してしまったんですね。おりません。で、今度5歳になった、その当事4歳だった子どもたちに「去年やったことを覚えてる？」っていうふうにお聴きました。ラビレッタ園の先生方に聴いたのは、まず、園の歴史をちゃんと覚えてるかとか、知っているかということをお聴きました。

というのは、2年前に子どもたちはレッジヨ市を上から見た図、都市のことを勉強していて、鳥として鳥瞰図のようなかたちで、鳥が見たようなかたちで都市を見るということを勉強しました。そのために高い山に登って市を、レッジヨ市を見ていたわけです。で、ある子どもたちは、鳥がというのではなくて、じゃあ、アリンコたちは、いったいどうやって街を見ているんだろうっていうことを言っておりました。で、その子どもたちは、みんな共同してアリの目から見た街、これは草むらだったりするんですけども、それを描きました。

じゃあ、去年はいったいどんなものをしていたかということをお、先生方に聴きました。更に、これはアリの目

から見た。これがその1年前にやっていた、小鳥のための小屋とそのプロジェクトです。どんな鳥たちが来ていたかっていうのも、子どもたちは覚えていました。中には名前は子どもたちが発明したもの。(笑い)

で、先生方は今年の5歳にいろんな質問をし始めました。先生方からの実は質問というのは非常に単純なもので、それによって子どもたちの答えの幅を広げていこうということでした。対話は録音しておきました。それは、録音したあとに子どもたちは、今度は絵を描くように、「絵を描いてみよう」っていうふうにごう言われました。で、子どもたちはいろんなことを覚えてました。で、いろんな絵を描いたりしてくれたんですけども、同時に一緒に作った水たまりというか、湖と言ってますけど、湖が干上がってしまった。今度は、自分たちの、もっと新しい湖を作らなくちゃっていう話になりました。

子どもたちのこういったきらきらした顔を見ていただければ分かるんですけども、もっと鳥のための遊園地をいいものにしようということで、子どもたちは興味をそそられてきました。で、子どもたちはどんどんと、また絵を描き始めました。これは、アネーゼちゃんが描いた、女の子ですけども、絵です。先生方はこれを研究したいというふうにお思うわけです。上に掛かっている鳥小屋は、小鳥の小屋はエレベーターが付いています。そしてそれから、噴水があります。で、今度は新しい湖。その湖には橋がかかっています。

アンドレアちゃんは、このエレベーターっていうのを、非常に、作ったのを喜んでるわけですね。エレベーターですね。このメカニズムですね。この機構をちょっと見ていただきたいとお思います。どうやったらこれがうまくいくのか。先生たちもいろいろと考えておりました。

フィリップくん、非常に科学者、小さな科学者。子どもたちの中にいろんな才能を持った子どもたちがいます。芸術家であったりとか、詩人であったりとか、科学者であったりとかします。その科学者の彼は火山を描きました。で、まあ噴煙がこう上がっているわけです。で、噴煙が上がっているのを見て、先生方は、ひょっとしたらこれでまた、雨にいくのかなんていうような話でありました。そこから、山から水を、水の通りを作って、その下に水車小屋っていうのを描いてます。水車小屋の水車があって、そこの所を鳥が飛んでいるわけです。

その水車小屋の上にヘリコプターがあるとお思いますけれども、何でヘリコプターを描いたのか、よく分かりません。多分、機械が好きだったんじゃないかなとお思います。アネーゼちゃんもすごい、素晴らしい絵を描いています。鳥たちを見る観察小屋を描いています。鳥小屋、

エレベーター付きのもの。これは絶対欠かせないものですね。で、その下に猫がいたり、ワンちゃんがいたり、たくさん鳥を描いています。

今まで、まず、鳥と会話、対話、それから最初の絵という三つのことを話してきました。そこから何が起きるのでしょうか。マラグッチ先生ほか皆さんが、ドキュメンテーションしているところをドキュメンテーションを私がして、写真を撮っています。ドキュメンテーションをしているところを、ドキュメンテーションするということは非常に大事なことで、じゃあ、どうやったら皆さんが、先生方が、ほかの園の先生方がドキュメンテーションということができるか、そのシステムとかを見ることが出来ます。

で、今までのその三つのステップを踏んでいる中で、子どもたちが、非常に多くの多彩な興味を持っているということが分かりました。それでもう一度、最初の対話から発展して行って、もう一度何か話をしていこうということになりました。で、子どもたちの対話が始まったんですが、その中で1人子どもが素晴らしいアイデアを持っていました。で、小鳥たちの遊園地を作ろうと、ある子が言い出したわけです。

で、春ごとにレッジョ・エミリア市のほうには、遊園地が参ります。それが毎年来るっていうのを、子どもたち知っておりますので、そういった考えが出たわけです。リナルディー先生ほか皆さん、いろいろ話し合いをまた持ちました。どうやったら、まず、小鳥たちの遊園地ができるかどうか。その遊園地を作ることによって、いったいどのような学びが、子どもたちの中に起きるかどうか。そういったことを話し合っております。

で、まあ、水のことが、雨の単元のことがありましたので、先生方が、いったいどんなことが起き得るだろうかってことを、まず出すわけです。で、その湖、湖がとにかく子どもたちの興味の中にあるのでそれが出るだろうと。その中で水が、前時に中心になっていたので、水の理論というのが出てくるでしょう、その中には、水道だったりとか、下水だったりとかっていうものが出てくると考えました。

で、ドキュメンテーションをどういうふうにするかを、先生方が考えました。ビデオを撮ったり、スライドを撮ったり、日記を付けたり、録音したり、それからメモをしたりってことですけども、先生とか、フォアマン先生とか、いろいろ担当を決めてたんですけど、マラグッチ先生はこの全部を見るんだっていうことで、非常に、一

番上から全部のすべてのことをご覧になってました。もうそろそろ、これが最後かなというところでしたので、この結果をマラグッチ先生は、「ファウンテン」という、「泉」という本に書いておられます。

これが、子どもたちが実際に対話の中で話したことです。そのほんの一部しか書いておりません。先生方が予想して、それから子どもとの対話にいったんですけれども、その中でたくさんの方がありましたので、その中の一部をご紹介します。子どもたちが描いたものというのは、エレベーターを描いたりとか、噴水を描いたりとか、水車小屋を描いたり、それから、当然、湖を描いたりしておりました。ここで、先生方は、はたと止まって、いったいどの部分を選んで、発展させていくかということを考え始めました。

で、このところで先生方の意思が入ってくるんですけども、噴水と、水車小屋の二つを選びました。どれが一番発展の可能性があるかということで、先生方はここに着目をしました。噴水、これはレッジョ・エミリア市の中に、噴水がたくさんあちこちにあるわけです。それは子どもたちの、心情的に子どもたちに、非常に近いものであることが分かります。で、その心情的なことだけではなくて、どのように噴水ができるかとか、動くか、そういったメカニズムに着目することもできます。

で、もう一つは水車小屋ですけれども、このところで、例の雨、水の議論が、子どもたちの中に、また、よみがえってくるのではないかというふうに考えて、この水車小屋を選んでいきました。噴水の部分で、子どもたちがした活動をご紹介します。市内のあちこちに子どもたちがずっと行って、どんな噴水があるか、その絵を描きながらその取材をしているわけです。これは噴水じゃなくて、水飲み場ですけれども、これは、子どもたちが実際に自分で水を飲むことができます。これが非常に人気がありました。

こういったいくつかの噴水を写真に撮って、スライドにして子どもたちと一緒に園の中で、それを上映して見た。ここで、子どもがスクリーンの前のほうに行って、水飲み場の噴水というか、水道を指しているんですけども、こういうことによって、子どもたちが、自分たちの経験のとらえ直しをしているわけです。で、子どもたちはいったいどの噴水が好きだったのか、絵を描き始めました。それは、実際に子どもたちが見たものもありますし、それから、子どもたちが自分たちで作り上げたものもあります。

わーっと水が吹き出ている所がたくさんあるのが好き

で、しかもその上にハートをたくさん乗せたりしている表現がなされています。今度は粘土で噴水を作り始めます。で、子どもたち自分自身が描いた絵を、設計図として前に置きながら、粘土を使って制作をしていきます。子どもたちはそのあとで、「いったい噴水はどうやって動くんだと思う？」ということ、先生が一人一人聴いていきます。こういった非常に近い関係の中で、子どもたちにじっくりと話を聴いてきます。

で、もう1人、これはフィリップくんですので、非常に科学的なことを、コメントをしてくれるわけです。で、スライドをスクリーン、紙の上に投影して、それであそこで線をこう、輪郭を取っていく、子どもが。輪郭を取った所に、じゃあどういふふうになんか水が流れているのかわかるのか、子どもたちがまた描いていきます。で、これはちょうど、その紙の上に、噴水の様子を映写したところなんです。

先生方はその活動の途中で、これがうまくいってるのかどうか、ほんとにどういふふうに進んでるのかを、再検討しています。この活動の中で、あるグループは非常に最初は大きくて、それがだんだんこう人数が減って行って、また、再びその人数が膨らんでいったという経過をたどった所もあります。

この人数の増減が良かったかどうか、それがいいふうに進んでいくかどうかを検討します。レジオの先生方は、子どもたちに、そのプロジェクトの中に強制的に入れるようなことはしません。子どもたちが興味を持ったところで、そのプロジェクトの中に、入っていくというふうにしておりまして、興味を持たせるようなことを先生方がいろいろ考えて、織り込んでいくことをしております。

この時点でも、園の中で小鳥のための遊園地を作れるかどうかを、先生方は一生懸命話し合っているわけです。こういった会議の中には、保護者の皆さんも入っていきます。先生方だけでなく、保護者の皆さんが入り込むことによって、そういったことができるかどうかということを検討しています。これは保護者の皆さんと一緒にやって、その会議をしているところです。

次はコミュニケーションの持つ力というものについて、お話ししたいと思います。

水車小屋の写真です。あまりはつきりしませんので、次に行きたいと思えます。水車小屋の水車部分のメカニズムの部分の所に、子どもたちは非常に興味を持ちました。それをこういった形で今表現しています。絵を描いて、そこから紙の模型を作っています。先生方は、これを見たときに、これでうまくいくかどうか、うまくいか

ないんじゃないかというふうに予想していました。この形では、多分、水を掛けても動かないのではないかと考えます。

で、紙でやると多分うまくいかないんだらうってことは分かるんですけども、子どもたちに答えを教えることはレジオの哲学ではなくて、子どもたちと一緒に答えを探していくというのが哲学です。違った素材でやることはできないんだらうかということ、子どもたちと一緒に考え始めました。この段階で、子どもたちがどうやってそういった考えを持ったのか、どうやってそういったことを作ったのか、そういった子どもたちの経験そのものを、また、とらえ直すという作業をじっくりとやっています。

先生がアンドレアくん、どのようにしてその紙のモデル作ったのか、その設計図の値をどうやって描いたのかを、じっくりと聴いています。話している途中で、ふっと、アンドレアくんが紙を持ち上げて、ふっと、その持ち上げたときに「あ、これはうまくいかないんだ」ということに気がきました。

で、ずっと机の方に行って、糊を取り出して、その紙の部品の一部を張り替えていました。ちょっと写真が暗いんですけども、非常に彼が喜んでいるのが、お分かりになると思います。で、そのあとに、もう一度今度は、粘土で作ったモデルの方に彼は行って、今度はその紙のモデルを替えたあとに、粘土のモデルの方に行って、その粘土のモデルの一つ一つの羽を付け替えていったわけです。

こうやって、確かに一つずつ見ると、時には、考えも付かないようなことが起きるわけですが、そのためには先生方がじっくりと、一つ一つ子どもたちと、子どもたちに寄り添って、その考えを掘り起こして行っているわけです。ですから、レジオがやっていることは、魔法ではなくて一つずつじっくりやれば、こういったことが起きるんじゃないかと思えます。

先生方が見たときに、子どもたちの中で1人だけ絵が分かるという、ほかの子どもは、あんまり分かってないんじゃないかっていうふうなことがありました。それで、風車を使って、風車を使ってその原理を理解させようってことになりました。この風車を見せることによって、子どもたちにこれが答えだと言わずに、子どもたちが並行してこれを理解することによって、水車のほうのメカニズムを理解していくことが可能になってきます。

ちょっと時間がなくなってきましたので、その遊園地がどうなっていたかということ、ちょっと手短にお

伝えたいと思います。スライド1個ずつに対して、一つの単語だけ、一つの言葉だけで言います。

これは遊園地の地図です。で、その詳細。公でのプレゼンテーション。プレゼンをしています。私がですね。コンペですかね。(笑い) 大師匠のマラグッチ先生とまた会議です。これドキュメンテーションの上のドキュメンテーションっていうことですが、先生方がぺらぺらのトランスペアレンシーシートっていうか、ちょっと薄い紙に描いて、その上に積み重ねて、表現している。

テイチャーナ先生はこれでは飽き足らずに、「これを3次元モデルで、立体としてドキュメンテーションしたいんだ」って言ってらしたそうです。頭をかいてらっしゃるのをご覧になると分かるように、非常にドキュメンテーションが難しいんだということが分かる。それで、噴水を作っているところです。これは運河を作っているところです。

次、行ってください。

で、その噴水を描くこと。で、これを公開する。そして、それを招待する。招待状が出ています。で、招待状を出したんですけども、これはレッジョ・エミリアの市長ですとか、何か重要な役職に立っている人たちに招待状が出ています。これは当然新聴記事になりました。これは噴水の中の一つです。保護者の方がアナウンスをしている。ケーキですね。

で、噴水があります。完成式の時になぜレッジョ・エミリア市中の人々を招く必要があったのか。というのは、多分、紙のお配りした資料の中にありますけれども、ドキュメンテーションというのは、子どもたちの声を広げる、訴えるのに非常に力強いツールである。マラグッチ先生は市議会で声を大にして言ったんですが、教育予算を削ろうなんて方々には。で、こういったかたちで見ていただいて、本当の評価をしていただきたいというふうに言っていました。

以上で、皆さんとぜひ対話の時間を持ちたいと思います。ありがとう。(拍手)

佐藤 まず、最初におわびをしなければ。(笑い) 教授会が長引かまして、途中からの参加になりました。

まず最初に、Lella Gandiniさんをお迎えできたことを、とても喜んでます。そのことの感謝を申し上げたいと思います。

あ、そうです。Lella Gandiniさんの本を翻訳することになって、恐らく、日本でLella先生のことを最初に紹介したのは、私ではないかというふうに思っておりますので、非常に心待ちにしておりました。非常に興味深い

んですが、実は、その4年前ですけれども、日本の、東京のワタリウム美術館で、レッジョ・エミリアの最初のミュージアムを開きました。

あ、そうです。(笑い) とても興味深いことには、実は、今日、朝、石川県のある市長さんが訪問して参りました。えーと、来てらっしゃる。あ、そう、彼がそうです。レッジョ・エミリアのアプローチを、これから加賀市に広めたいということで、訪問されました。

Gandini 佐藤先生が訳してくださったっていうのを、知っておりましたし、また、皆さんレッジョの方でそういったことを話しておりました。

佐藤 それで、今日その市長さん。あるいは訪問者の質問は非常に的確で、どこから始めればいいのか。何をすればレッジョ・アプローチになるのかですね。その質問でした。

僕の英語簡単だから、翻訳必要ないですよ。(笑い) 必要があればやりますけど。(笑い) 簡単に言います。四つのポイントです。創造的環境、アトリエ。それからプロジェクトとコラボレーションの活動。クリエイティブアクティブ。それからドキュメンテーション。それと教師がやはり学ぶ専門家になるようなコミュニティー。で、この中心的なポイントは、ドキュメンテーションだと私は思います。非常に重要なポイントはドキュメンテーションだと思います。

で、ドキュメンテーションに関して、私がぱっと思いつくのは、ロリス・マラグッチの言葉です。ロリス・マラグッチというのは創造的な教師には、二つのポケットが必要だといっています。その一つは確かな知識を入れるポケット。実践を通して学びながら、これは確かだ、これは確かだを入れるポケット。もう一つのポケットは不確かな問いですね。疑問。あるいはアンビギュイティーっていう、非常にあいまいなもの。一方はクリアなもの。一方は曖昧なものですね。その両方を入れることが必要だと。僕は素晴らしい言葉だと思う。

Lellaが今日おっしゃったことは、哲学を語るとおっしゃいました。その哲学を語るのに、物語を通して哲学を語ると言います。これがとても重要だと思います。

Gandini ジェローム・ブルーナーも物語を語ることができなければ、教育にはならないというふうに言っておりましたので、彼もレッジョ・エミリアの教育に非常に情熱的であったと。

佐藤 最近日本の教師たちも幼稚園の教師たちも、記録の取り方っていうのを変えています。しかし、それはいわゆるポートフォリオのような。ポートフォリオというのは・・・。

Gandini ドキュメンテーションとポートフォリオって
いうのは、二つ併せ持つことができると思います。ポ
ートフォリオのようなものを作って、それを保護者が楽し
んで、子どもたちがそれを見て取り直したりすることは
できると思います。

佐藤 私はドキュメンテーションの機能というのは、単
なる教育研究とか、実践研究の記録ではないところに、
魅力を覚えています。つまり、それはストーリーを作る
ツールであるということと、そのストーリーを作ること
によって、人と人とがつながる。つまり、研究というよ
りむしろ関係を組織する力ですね。

このストーリーというのは、もちろんそれ自体が、子
どもたちの成長や教師の成長や親の発達の記録なんです
けども、単なる記録じゃなくて、また、それが歴史を作
っているわけです。それが同時に絶えずコミュニティー
を作っていく。関係を作っていくところに、ドキュメン
テーションの持っている非常に重要な機能がある。これ
は、われわれが、これまで教育の記録というものを考え
ていった考え方とは、やや違うのではないかと思います。
発達研究というかたちで見ると、子どもを見るという、理
解するというかたちに閉じ込めていたこれまでの記録
を、もっと子どもたち同士のつながり、教師たち同士の
つながり、それから親と教師とのつながりというよう
なところでみる。

Gandini 今晩はコミュニティーを作るというところに、
先生が目されましたけれども、こうやって対話を持
てること、あるいは先日、昨日訪問しました二つの園を見
ましても、いろんな所で、いろんなかたちで、レッジョ
のような実践ができるのではないかというふうに思っ
ております。今日、こういったコミュニティーに入ること
ができて非常にうれしく思います。(拍手)

佐藤 いくつか質問受けてください。

Gandini もしご質問がございましたら、ぜひこの機会
に。

鈴木 だれしも佐藤先生みたいになれるわけじゃござ
いませぬので。(笑い) 日本語でも結構ですよ。

大戸 私はお茶大で、現職教育担当しております、大戸
と申します。

佐藤 どうぞ、英語でお願いします。(笑い)

秋田 自分で通訳もお願いしますね。(笑い)

大戸 それでレッジョ・エミリアの特色として、経験
をドローイングする。絵を描くということが非常に重視
されています。それから次に、粘土でモデルを作るという
プロセスがあるわけです。どうしてこのようなところに

重視されたのか。日本でも粘土を使いますけれども、大
量の粘土を使っていますよね。ということは、絶えず教具
として、子どもたちのアイデアを表す道具として、粘土
がいつも教室の中に置かれてるんでしょうか。その粘土
の意味ってというのが、よく分からなかったものですから。
Gandini マラグッチ先生が見つけた、子どもたち
がいかにたくさん、多くの表現する言葉を持っているか
ということがございますけれども、特に絵を描くという
ことを、殴り書きのスクリプリングに始まって、非常に
早い段階で子どもたちがそれを道具として身に着けてい
るということが、お分かりになると思います。

子どもたちはいつもこういうふうに言っておまし
た。先生に考えを説明するのに「うーん、あー、何か難
しい、だけど」って、何かこう「先生、絵描いていい？」
っていうふうに、こうすぐにそちらのほうに参りました。
粘土がいつも身近にあるかということなんですけども、
子どもたちにとっては粘土であれ、紙であれ、針金であ
れ、木であり、もっとほかの自然のものであったりする
んですけども、そういったものを、常に、近くに置いて
おけば、子どもたちはそういうものを使って、自分たち
の言葉というのを身に着けて、表現していくということ
です。

子どもたちにとって、粘土は非常にさわっていて気持
ちのいいものです。さわっていて、小さい子でもぺた
ぺたとすることが大好きです。そういったもの、そういった
小さい子どもたちにとってもそうですし、素材として
は、芸術家たちが、高名な芸術家たちが粘土を使ってい
ろんな表現をしています。ですから、初歩から芸術家ま
で誰もが、使えるのではないかと思います。

それはその子どもたちってことではなくて、先生方も、
最初にそういった素材というものをどういうふうにする
か。最初に先生方が実際に経験をして体験を積み重ねる
ことによって、子どもたちの支援をしていくことができ
ます。ですから、先生方がまずそういったものに触れて、
その経験を積み重ねていくことが大事だと思います。

鈴木 大戸先生よろしかったでしょうか。じゃあ、後ろ
のほうで。

市川 私は、東京の中野区の大和幼稚園で教師をして
おります市川と申します。12年前にレッジョ・エミリア
に行ったんですけれども、今、うちの園でもプロジェク
ト・アプローチをここ数年間チャレンジしております
が、いくつかプロジェクト・アプローチを、日本の現場
でやるには難しさを感じております。

私たちには、ペタゴジスタやアトリエリスタはいませ

るので、私が、先生がみんなすべての役割を担わなきゃいけないということ。あと、非常に難しいのが、日本の教師たち自身が受け身の教育、どちらかというと教師主導型の教育を受けてきましたので、このプロジェクト・アプローチの実践が難しいということです。

私の幼稚園で「おぼけ」というトピックでやってみたんですけど、「千と千尋の神隠し」とかいろいろアニメの影響を受けまして、子どもたちが日本のアニメとか、キャラクターとか、そういうことばかりいろいろ、その意見を取り出してきて、そういうことにわれわれが耳を傾けると、ちょっとトピックがずれてきてしまって、そういった場合にどこまで子どもの意見を聴くとか、どこまで教師の意見を聴くかで、非常に問題にぶち当たるのがあって、こういう場合にどうやってバランスをキープしたらいいかっていうことが、まず、困っているポイントです。

Gandini 大変良い質問ありがとうございます。本当に子どもの言葉を聴くということと、それから教師の意図とのバランスをどう取るかは非常に難しいことです。これは完璧なものはないのではないかと思います。で、レッジョでも、米国でレッジョ・アプローチを採っている園でも、ずっと議論しっぱなしということで、必ずその問題にはぶち当たるわけでありまして。問題はなければいけないと。逆に思います。

例えば、ちゃんときちんと決められたカリキュラムですね。例えば、秋になったら秋の季節みたいなことをした時には、いろんな問題がありますけれども、で、それをやっていたときには、先生方は問題ないと思ってずっと実践をしてらっしゃるでしょうけれども、子どもたちにとっては、実は、それが問題だったりもするわけです。テレビとかアニメの影響のことしか話さないということは、テレビに問題があるということです。

でも、それを、例えば問題があるからといって、それを無視しろというわけではありません。そのことも、その世界、子どもたちの世界も採り入れながら、いろんなことを話していく。まあ、心情について話していったりとか、性について話したりとか、そんなことをしていく必要があると思います。

で、例えばテレビの、あるいはアニメのキャラクターについて、話しているということがあるかもしれませんが、それをしっかり記録を取って、それを詳しく分析していたときに、子どもたちが自分たちの中にある考えを、先生に伝えようと、一生懸命伝えようとしていくってことが、きっと分かってくるのではないかと思います。

先生方はどうしても話をするときに、子どもたちがいったいその中で何を学んでいるかということを出していくということに気を付けられたらいいかと思います。そのアニメのキャラについて話しているときに、子どもたちは、非常に複雑な語彙をそこで使っている。使えているのかもしれないわけです。

例えば光のスピードであるとか、そういったものも、その中に入ってくるかもしれませんが、あるいはその中に数学的な考えとか語彙が入ってきているのかもしれませんが。それは問題があったっていうのは非常にいいことです。問題があったということは、先程の小鳥の遊園地の時にもありましたように、何回も先生方が、会議に会議を重ねるということがあります。イタリアでも、テレビアニメ、非常に大きな力を持っています。

先程のアトリエリスタとかペタゴジスタのお話ですけども、アメリカで実践を、レッジョ・アプローチで実践をしているという所は、やはりそういったアトリエリスタとかペタゴジスタの区別があるわけではありません。しかし、先生方が、そういったある特定の領域の専門性を持った人を外から招いて、その英知を聴くということをしているわけです。ペタゴジスタはその学校の中にいる人たちで、その役割をするというだけではなくて、学校の外、例えば、教育委員会ですとか、そういった所で専門性を持った人に来てもらってアドバイスを受けるといったことも可能ではないかと思います。

今、先生がご質問なさったことに対して、非常におめでとうと言いたいですけれども、そういった問題にぶち当たっているということは、非常にこれからの成長というか発展があると思います。がっかりしないで、頑張ってください。(笑い)

佐藤 今のコメント、非常に示唆的だったので、ちょっと付け加えます。秋田さんも一緒に行ったんですが、レッジョ・エミリアの幼稚園に行った時、やっぱり子どもたちもスーパーヒーローで遊んでるんですね。そういうおもちゃが、こういうふうにあるわけですね。だけど、重要なことは、多分、先生が、その子たちのそういうある種の商業主義文化的なものについての、子どもたちが関心を持っていることを、丁寧に聴いている。非常に丁寧に聴いている。だけどそれを採り上げることはしない。分かります？あの、僕ね、ああいうのを採り上げる人って、丁寧に聴いてないと思う。(笑い)

逆説的なんだけど、聴かないからもう子どもの関心は、これだと思って採り上げる。そういう問題がすごくあると思います。これまでを見て。つまり、子どもにこびってしまったのは、ちゃんと子どもの話を聴いてないで

すね。子どもが持つて世界をちゃんと共有してない。共有できれば、もう子どもってそこからずっと離れていきますからね。そういうことを思いました。このことは、同じことを経験したのが、10年ぐらい前なんですけど、そのころ僕は、ご存じのようにシカゴ大学のビビアン・ペイリーさんのいくつか翻訳していますが、彼女の教室を観察に行き訪問しました。ビビアン・ペイリーの部屋をね。

彼女の教室で採り上げられるストーリーというのは、そういう話は全くありません。絵本とか、非常に真正な文学を採り上げたストーリーで、子どもたちが遊んでいるわけですね。それで発達しているわけですが。それである時、2、3回行ったあとかな、こう分かれて、じゃあまた来年、再来年、来ますからねっていうかたちで、学校を出て、もう道もずっと離れた時に、ペイリーが息を切って、おばあさんですから、はーはー言いながら追っ掛けてくるんですね。「プロフェッサー佐藤」と呼びかける。で、何だろうって思ってこう呼びかけると「忍者のビデオないか」って。(笑い)「いい忍者のビデオない？」って、こう言うんです。で、あったら送ってほしい。子どもたちが、忍者に今夢中だから。(笑い)

それね、すごい感動的だったんですね。その、だからって忍者を採り上げては実践しないわけですよ。そう。それを通して子どもを理解する。だからそういうものとして、そこまでね、やっぱりやられてることに、非常に感動を受けました。ですから、今の教訓は、やはり、そう、素晴らしい話です。そういう商業主義的な文化というふうだね、こう採り上げてしまう教師。あるいは、表層的なテーマを採り上げてしまうというこの裏側に、僕らも同じ問題があると思うんですけど、ちゃんとそこにかかわってる子どもの姿を聴いていない、受け止めてないという問題が逆にある。

ちゃんと聴けば、別のものが見えるはずですね。そういうお話だったというふうに思いました。とても素晴らしいですね。素晴らしい、ほんとにいい話で。ちょっと補足させていただきます。

鈴木 じゃあ、あとお一方ぐらいということですが、どうでしょう。

大塚 江東区の大島幼稚園の大塚と申します。今、一つ、プロジェクトとして、小鳥の遊園地を作ろうという、プロジェクトが立ったときに、この期間とか、そういうものについてある程度、教師側で大きな予測を立てて行っているのでしょうか。それとも子どもが、満足して、充実したときで、そこで一つ終着するということでしょうか。その辺りをお話してください。

Gandini はい。ご質問ありがとうございます。その小鳥の遊園地のような活動が、長いものとして今日お話しを致しましたけれども、先生方の期待するものが、非常に高かった場合、そして子どもたちがそれに興味を持ちますと、いろんなことを話してくれます。

で、いろんな可能性がそこから出てくるんですけども、最初からいろんな、例えば3歳、いろんなパーツでその小鳥の遊園地ができるわけですけども、例えば、3歳児は最初からそのプロジェクトの中に入っているわけではありません。全体がだんだんこう、園の中全体がそういった雰囲気になってきたときに、3歳児もこういったかたちで参加したい。小鳥の仲間を作りたいとか、そういったことになっていくようになります。

ただ、子どもたちに対しては、先生方がいつも、何をしたかったのかということ、常に子どもたちに問いかけ直す必要があります。そうでないと、子どもたちの興味が、あっちに行ったりこっちに行ったりして、いろいろ広がったり、横に行ったりしますので、それを何とか目標というものに子どもたちを引き戻す作業を何回かする必要がございます。ですから、どこまで行くか分からないということはありません。

子どもたちが、小鳥さんたちの遊園地を作りたいというふうにしたものですから、それは子どもたち自身が持ち出してきた目標なんですね。その小鳥の遊園地のプロジェクトというのは、実は、7年も8年にもわたってずっと続いてきているわけです。で、完成式のようなことをマラグッチ先生がしたいと言っていた時には、政治家の人も呼んで、そういったもので一つの区切りをつけたわけです。

でも、ドキュメンテーションをドキュメンテーションする側としては、ちょっと残念だなと思っているのは、ちょうどその時に、小鳥たちがいったいどういったかたちでお互いにこうコミュニケーションを取っているんだろうって考え始めたときに、そのイベントがこう来たわけです。(笑い) それから、何とかこう、それを続けていきたいなというふうに思っていました。

無藤 じゃあ。

鈴木 急に言われてすみませんけれど。(笑い)

無藤 あの、質問一つなんですけど、子どもたちが作るドキュメンテーションっていうか、作品っていいですか、それは今日のもそうなんですけど、非常にこう科学的でありながら、非常に芸術的だと思うんですね。それはいつも不思議に思っているんで、私の推測では多分、科学は非常に法則を追及するものだけれど、芸術は常に具体的な

もので、その二つがつながることが幼児にとって非常に深い意味を持つと思うんですけど、その辺りのこと、もうちょっと説明していただければと思います。

秋田 難しい。

佐藤 難しい。(笑い)

Gandini 大変、あの、そういう質問してくれて、ありがとうございます。

子どもたちがものを扱っている時は、子どもたちは同時に頭も使っていることをわれわれは考えておかななくてはいけないと思います。で、もの、素材を子どもたちがさわったときに、それがどういうふうに、どんな形で動くのかを感じながら子どもたちはものを作っていったりするわけです。

そして、最初にそれをさわったとき、2回目にそれをさわったとき、そういった経験の積み重ねの中で、子どもたちはその中で組み立てていくわけです。その考えがだんだんつながっていきます。

100の言葉、「子どもたちの100の言葉」っていう表現の中には、考えるっていうことと表現するっていうことが一体で、子どもたちの中では一体であるということ表現するのにそういった言葉を使っております。

で、「イン・ザ・スピリット・オブ・スタジオ」という本の中で、アトリエリスタの皆さんに、その質問を投げ掛けて聴いております。というのは、アメリカ、米国のほうでは、だんだんと表現にかかわるような予算がどんどんとカットされている。ただ、子どもたちの科学的な、あるいは数学的なものの見方、考え方を育てるためには、そういった表現するというものは、非常に大きくかわってくるのではないかと。それで、この本を書いております。

鈴木 で、これは私の言葉ではなくて、アトリエリスタの皆さんの言葉ですよっていうふうにおっしゃってらっしゃいます。

Gandini アメリカで先生方を指導している時に、園の先生方が、このプロジェクト・アプローチを通して、要求されている、必修になっているのは、どんな子どもたちの発達の側面がここの中に入っているかというのを、ちゃんと言葉で説明できるように、偉い方が来られてご覧になったときに、ちゃんとそれを説明できるようにしてるといことです。

それによって説明責任が果たせる。まあ、予算がかかわってきますので、そういったことを先生方に頼んでいます。

小田 すみません。私は質問ではなくて、お礼と確信が

できたことについて申し上げたい。まず、最初に、あこがれのGandini先生に、お会いできて大変うれしく思います。私、今年の1月に先生に会いに行ったんですが、イタリアではすっぱかされたので、(笑い) やっと、日本で会えて大変うれしく思っています。それから・・・。

今日の最初の話のルチアから始まった、ルチアそのものが、そこから先生が解いてくださったので、やっと確信ができたし、今日もみんなも確信できたと思うんだけど、結局、レッチョ・エミリアって言うてしまうと、作品に目がいたり、いわゆる、先生方の、絵画の先生だとか、そういう先生方のほうに目が行ってしまいうんだけど、今日は先生がルチアを通して、最初にやってくくださったように哲学だという。その哲学は何かっていう、それは子どもが主役であって、子どもたちの思いを生かすということが大事だと。

ところが、その裏側で、そのペダゴジスタをはじめとして、綿密な計画と、綿密な教材研究と見通しがあるわけですよ。それを含めて哲学とおっしゃってるんで、われわれは保育哲学を今日は学んだんだろうというふうに思っています。

まあ、私も佐藤先生がお訳しになったあの本を通してながら、Gandini先生やマラグッチが言っているのは、あくまでもその作品を見てくれと言ってるわけではなくて、結果としての作品は見てほしいけれども、実は、保育に哲学があるんだ。ここは、子どもと共に生きているんだという、その部分をぜひ見てほしいということは、何回も繰り返し訳の中に出てくるんだけど、今日は先生のお話が非常に分かりやすく、最後に特に、中野のお嬢さんが質問なされたことに対しての応え方を見たら、やっぱり僕たちはどこかで枠組みを持った、哲学じゃなくて、枠組みを持って保育をしてるな。これが良いのか、悪いのかっていう、いきなり枠組みを持って常にやってくる。

ガンディーニ先生はそうじゃない。そのまま、あるがままをどうして受け入れていかないんだ。そこの中に真実はあるでしょっていう、この問いかけが、やっぱり、僕たちいつもそうしたいと思いながら、良いほうへ行くか、悪いほうへ行くかという、何か枠組みだったり、時間にとらわれて何日もやっていいのか。さっき、先生がおっしゃったように、偉い先生を呼ばなければ、延々と続いたかもしれませんね。そのような子どもの世界がいつまでも続くように、今日はほんとに心から感謝します。ほんとにあこがれの先生、今日はサインか、さっき握手したから(笑い) あとは、ハグで終わりますか。ご主人

が来ていらっしゃるから、まずいか。ということで、ありがとうございます。(拍手)

秋田 どうもありがとうございました。私は昨日、Lellaと一緒に二つの幼稚園に行って、一つの幼稚園で秋の林に子どもたちが出掛けていきました。で、一緒に出掛けていったんですけども、大変感銘を受けたのは、普通は外国の方が来られると、システムはどうなっているのか、どういう保育をするのかというようなことを、まずカリキュラムとかを訊かれるんですが、一緒に散歩をしていたらLellaが「見て、あの先生の表情はこうよ」とか「子どもはこうよ」って言って、もうそこにいる子どものストーリーを彼女が見つけているわけです。

野口さんが「若い先生は、どうやってドキュメンテーションを学ぶんですか」って、たずねられました。「面白いことを見つければいいのよ」って若い先生に言ったら、その若い先生が「面白いことがなかなか起こらない」ってこたえたというんですね。(笑い) それに対して、Lellaが言うのは、すべてのところに、日常的に豊かな

ものがあるって、「リッチノーマリティー-rich normality」という言葉でおっしゃってましたが、そのいろんなところに豊かであるっていう、そういう発想が、やはり保育を豊かに見る目を育てていくのだろうというふうに思いながら、そして、過去を抜き出して事実を並べる、コピーするのではなくて、まさにポジビリティ、子どもの有能さの可能性という未来を見ながら、記録していくのだというようなことを、今日のお話の中で、哲学の中で語っていただいたように思います。

このあと、Gandini先生は、明日から横浜インターナショナルスクールのほうで、ワークショップをされる予定になっています。本当に出会いに感謝を致したいというふうに思います。それではLellaに大きな拍手をして、終わりにしたいと思います。(拍手)そして、いろいろ院生の方が、今日は実は椅子を並べたり、準備を全部やってくれました。本当にありがとうございました。それでは終わりにしたいと思います。(拍手)
(終了)